

「御心のままに」

詩篇 第56篇1節～4節
マルコによる福音書 第14章32節～42節

説教 村上修平牧師

主の祈りの中の3番目の祈りは、「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」です。「天」とは神さまのご意志が完全に行われるところです。そのように、地上の私たちの間でも神さまのご意志が行われますように、という祈りです。

今日一緒に読みましたマルコによる福音書の14章の32節以下は、《ゲッセマネの祈り》と呼ばれる場面です。この時主イエスはいつもと様子が違って、「恐れおののき、また悩みはじめて」(33節)、とあります。病気の人を癒し、死人をよみがえらせることができるイエスさまならば、自分をも助けられるのではないかと私たちは思います。けれども、主イエスは驚くほど死に対して恐れ、悲しみもだえています。この死はただの死ではないからです。罪人として、主イエスは神さまの罰をその身に受けて、私たちの身代わりになって死んで下さるといふ意味がありましたので尚更のこと、その死は主イエスにとっても受け入れがたく辛いものであった、と想像します。主イエスは、恐れと悲しみのそのままの姿で、父なる神さまに、「もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるように」(35節)と熱心に祈り続けました。

主イエスは、神さまに「アバ（お父さん）」と呼びかけて、『あなたにできないことはない。あなたは私の叫ぶ祈りを絶対に聞いて下さる』という全き信頼をもって祈りました。祈りにおいて大切なことは、この信頼です。そしてもう一つ祈りにおいて大切なことが、主イエスの次の祈りです。「しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」(36節)。イエスさまの正直な願いは、この苦しみが取り除かれることでした。けれども、『もしあなたの御心が、私がこの苦しみに耐えることで多くの人々が救われることにあるならば、私はあなたに従います。御心のままになさって下さい』と祈られたのです。とても力強い祈りだと思えます。信頼と献身です。私の知らないところで勝手に神さまがして下さいという祈りではなく、このお祈りを祈る『私』を通して、神さまの御心を行って下さいという、積極的な祈りなのです。主の祈りは戦いの祈りです。私たちの自我に逆らうようにして、それでも神様の御心が行われ、神さまの救いのわざが私を通してなされることを、祈っていくお祈りです。だから時に私たちは、このお祈りを祈るのが苦しいのです。

しかし、フォーサイスという神学者は、『祈りの精神』の中で次のように言います。《我々はあまりに早く「御心がなりますように」と祈りやすい。しかし、あまりにも簡単に事態を神の意志として甘受することは、柔弱や怠惰を意味するのである。神の意志に打ち勝つほどに祈ることが、神の御心であり、神のより高い意志の実現を目指して、頑強に粘り強い祈りを捧げることが、更に御心に適うことである。》神が定めた運命だから仕方がないと簡単にあきらめて「御心がなりますように」と祈っても意味がありません。私たちは神さまに、「あなたの御心を変えてください」とまで訴えることができるからです。神のご意志に打ち勝つほどの粘り強くしつこい祈りを神は喜ばれる、と言うのです。

主イエスも初めから「御心のままに」とは祈っていません。『父よ、助けてください。あなたにできないことはありません。この苦しみを私から取り除いて下さい』と祈り続けました。しかし、心を注ぎ出してお祈りをしている間に、主イエスのお祈りは変わっていくのです。主イエスの心と父なる神の心が祈ることによって近寄って行って、ついにはひとつになったのではないのでしょうか。ですから主イエスはこの祈りを祈られた後、「立て、さあ行こう」(42節)と言って、力強く十字架へと向かっていったのです。主イエスは『私を通して神さまが、本当に大きな、素晴らしい御業をなして下さる』と信頼をして、向かっていったのです。祈りとはそういうものだと思います。神の御心は必ず私に対していつも良いことをなして下さい、と信じていることができるのが祈りの力です。

今日ここにいらっしゃる皆さんのお祈りも、神さまは確かに聞いて下さっていて、心を動かしておられます。神さまは私たち一人一人を、本当にご自分の命を差し出すほどに愛して下さいからです。そして、私たちが神さまに信頼をして祈ることを待っておられます。どうか神さまに信頼をして、そして願わくば、『私を通してあなたの救いをなさって下さい』と、私たちの身を投げ出して神さまの御心に仕えていくお祈りを祈りたいと思います。

(説教要約奉仕者)